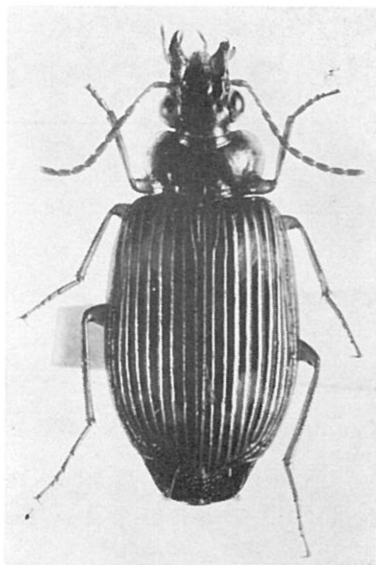


稿 KŌCHŪ 虫

ヒメキノコゴミムシの北限記録

小田 義広

ヒメキノコゴミムシ *Coptoderina osakana* NAKANE, OHKURA et S. UENO は従来、関西方面で数頭が得られているにすぎなかったが、筆者は山梨県の日野春で本種を採集しているので、北限記録として報告しておく。



1 ex., 山梨県日野春, 15. Ⅷ. 1977

夜間、クスの樹幹を這っていたもので、同時にキノコゴミムシ *Lioptera erotyloides* BATES も1頭採集している。

(〒253-01 神奈川県高座郡寒川町倉見)

ナガサキクビナガゴミムシを佐賀県で採集

深町 宗通

ナガサキクビナガゴミムシ *Eucolliuris litura* (SCHMIDT-GOEBEL) は、一見同属の *E. fuscipennis fuscipennis* によく似るが、頭部は複眼の後方で左右に膨隆し、前頭の点刻はより大きく、また、複眼後縁を結ぶ線より後方にも点刻をもつことなどで容易に区別できる。

わが国では、1883年に BATES が長崎より記録したが、その後現在にいたるまで記録を聞かない。

筆者は佐賀県小城郡小城町で、灯火に飛来した本種を得ているので報告しておきたい。

1 ex., 佐賀県小城郡小城町, 28. Ⅷ. 1977

(〒845 佐賀県小城郡小城町二瀬川)

北海道における

キバナガミズギワゴミムシの採集記録

井上 寿

キバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus yokohamae* BATES は、従来本州・四国および九州に分布し、特に太平洋に注ぐ大きい河川の河口付近に生息していることが報告されている。筆者は北海道中川郡豊頃町の太平洋に面する十勝川河口の泥土上において本種を採集したが、日本における北限記録と思われるのでここに報告する。

2 exs., 中川郡豊頃町大津, 17. Ⅷ. 1977

22 exs., 同上, 31. Ⅷ. 1977

7月17日における本種の生息地は、水際に近い泥土上で、雑草がまばらに生えている所であった。7月31日は草がまったく生えていない泥土上で、当日は高温(30°Cを越えた)であったせいか、活動中のものは1頭のみで、他はすべて流木下の水棲動物があけた直径3~4 mmの垂直な穴の中に潜んでいた。高温をさけての行動と思われる。

なお、得られた24頭は、いずれも上翅前部の黄褐色紋がほとんど消失した個体であった。

(〒082 北海道河西郡芽室町新生)

北海道立十勝農業試験場専技室)

北海道におけるトビミズギワゴミムシ

亜属2種の生態について

井上 寿

トビミズギワゴミムシ亜属 *Cylindrobracteon* はわが国から2種が知られている。北海道においても、コホソトビミズギワゴミムシ *Bembidion(C.) aeneipes* BATES とホソトビミズギワゴミムシ *B.(C.) chloropus* BATES の両種が分布しているが、採集記録はいずれも比較的少ない。道内における両種の生態を報告しておきたい。

前種は内陸の平坦地の河原や海岸の湿った砂地に普通に生活していて、早春より出現するが、9月上旬頃にはこれらの場所から付近のやや乾燥した所に移動する。歩行はきわめて早く、また日中の高温時にはよく飛翔するので捕えることは容易ではないが、低温曇天の日を選ぶと2、3頭から5、6頭が集合している場合があるので

比較的採集しやすい。

後種は今まで採集例が少なかったが、1977年8月中旬に北海道網走市能取岬近くの海に注ぐ小川の湿った砂地において、局地的に群棲する場所をみつけた。採集した当日は気温が高かったせいか、逃げられる個体が多く、わずかに31頭しか得られなかったが、ここではコホソトビミズギワゴミムシは1頭も採集できなかった。両種にはあるいは住み分けができていのかかもしれない。コホソトビミズギワゴミムシに比較して、ホソトビミズギワゴミムシは、より海浜性を有する種類ではないかと考えられる。

(〒082 北海道河西郡芽室町新生
北海道立十勝農業試験場専技室)

フチトリヒメヒラタタマムシの 本州における採集例

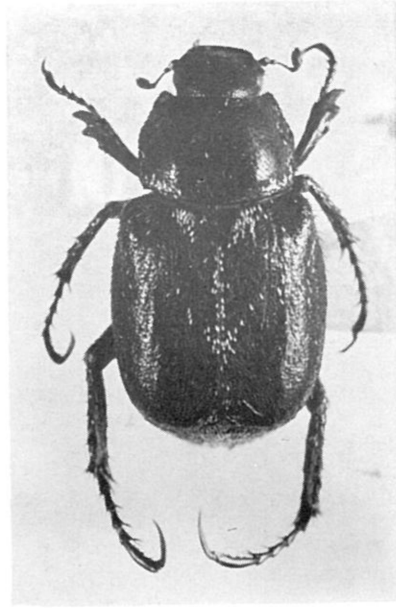
藤田 宏

フチトリヒメヒラタタマムシ
Anthaxia (Haplantaxia) rubromarginata MIWA et CHUJŌ
は北海道・本州・九州・対馬・朝鮮・シベリア東部(ウスリー)における分布が知られているが、日本では稀な種で、特に本州における記録はわずかなものと思われるので、筆者の手元の記録を報告しておく。

1ex., 福島県南会津郡湯の花,
16. Ⅶ. 1974, 小林敏男採集

広葉樹伐採枝のピーティングで採集されたとのことである。貴重な標本を恵与された小林敏男氏に感謝したい。

(〒110 台東区台東 2-29-6)



を設立した(昆虫学評論, 29(1/2), pp. 59~61, 1968)。たしかに、前肢・前胸背側縁の刺毛列・後肢第5付節の下面の小歯などを比較観察すれば、*moerens* m. および *moerens ohbayashii* と *hakonensis* とははっきりした違いをもっているので、*hakonensis* は *moerens* の var. または ssp. ではなく、独立種とした野村氏の考えが妥当と思われる。

さらに前記論文の中で野村氏は、*H. hakonensis* の産地として箱根仙石原・箱根・神山をあげ、「本種の産地は目下のところ、箱根付近に限られているが、伊豆半島に本種やイノウエスジコガネ *Anomala inouei*^{注1)} のような固有種を産することは分布上興味深いことである」とのべている。

野村氏のあげた3ヶ所の産地の中の「箱根」がどこをさすのか不明確ではあるが、いずれも箱根外輪山の内側と考えるとすれば、続く文章からみて、野村氏は箱根を伊豆半島に含めて考えているようである。

伊豆半島を考える時に、箱根地方までを含めるか否かは、かなり難しい問題である^{注2)}。そこで筆者は、これに深入りすることをしないで、より明瞭な伊豆半島におけるハコネアシナゴコガネの産地を探してみたが、文献の中に見つけることはできなかった。ところが、幸いにも今回下記のように本種を採集することができたので、伊豆半島における初記録として報告しておく。

1♀, 静岡県伊豆・天城峠, 16. Ⅶ. 1977,

石田正明採集

本個体と箱根(駒ヶ岳・神山)産の個体と比較してみたところ、箱根産のやや小型で背面に鱗片の少ない個体

ハコネアシナゴコガネを伊豆・天城峠で採る

石田 正明

ハコネアシナゴコガネは沢田玄正博士により、クロアシナゴコガネ *Hoplia moerens* WATERHOUSE の var. として記載され、模式産地は箱根仙石原(holotype・allotype・paratype)および赤城山・魚岩留・蓼科・万座温泉・富士山・日光・諏訪東俣などがあげられた(日本の甲虫, 2(1), p.39, 1938)。

野村鎮氏はこれについて、holotype を含む箱根産のものを独立種と認め *Hoplia hakonensis* SAWADA とし、他の産地のものを *H. moerens ohbayashii* として新亜種